moc OSAKA 大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

2008.1 No.84

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

休館のお知らせ
当館では地下電気機械室工事のため、
平成20年3月31日（月）まで休館中です。
なお、特別展「美の求道者・安宅英一の眼―安宅コレクション」は
下記の期間、福岡、金沢に巡回をいたします。

福岡展
平成20年1月5日（土）～2月17日（日）
福岡市美術館

金沢展
平成20年2月29日（金）～3月20日（祝・木）
金沢21世紀美術館

加彩婦女俑
唐時代・8世紀中葉
高50.5cm　Acc.No.10868（住友グループ寄贈）

風塵往来 12

南イタリアのアドリア海寄りには、地中海的気分に満ちた個性的な魅力ある町が点在する。代表格は、アルベルベッロ。トゥルッリと呼ばれる独特の円錐形ドームを持つ農家が林立する町の風景は、一瞬、お伽話の世界に入ったかのような錯覚を抱かせ、多くの人が訪れる。しかしそこから僅かの距離（九キロ～三十キロ）にありながら、ロコロトンド、チステルニーノ、オストゥーニなどの町は、旅の案内書にもほとんど記載はなく、訪れる人も稀である。寂れた感は否めないながらも、観光化の波にもまれるアルベルベッロより、これらの町の方が、私にははるかに心そそられるのである。その特徴を一言で言えば、丘の上の城壁に囲まれた白づくめの小さな町のたたづまい。家々の外壁や屋根、バルコニー、階段、扉、路地裏の隅々までが石灰で塗りつめられている。青い空を除けば、どこを見ても白一色の町の光景である。マラリヤ退治、との説もある。道幅は狭く曲がりくねり、そこから何本も袋小路が奥へ奥へと入りこむ。道路からは直接二階、三階、四階へと外階段が壁を伝い伸びていく。これらの階段は道の景観に快よいアクセントとなるだけでなく、生活の利便性も高める。踊り場はバルコニーに、それを支えるアーチは、下の階の瀟洒な玄関を形づくるのである。家の中はほとんど台所つきの居間と寝室だけの簡素なもの、窓は小さく、閉鎖的。こうした住居は内に籠るより、外に出て近隣の社交に明け暮れる方が快適である。袋小路には、椅子を持ち出して語り合う老人たち、走り廻る子供たちの姿が、静かな町を息づかせる。白い町は、どこか人を夢想に誘いこむところがある。それはあたかも、巨大な白い造形作品のようでもある。

これらの白い町とイメージの類似するのが、現代陶芸作家の川崎毅氏の作品群である。立方体を積み上げ重ね合わせ、削りして、強固な家の集合体を作り上げている。細く長い階段がつき、居住空間を思わせる空洞や小さな門が開けられ、白泥が塗りつめられているのである。私は長い間、この人の一九八〇年代から最近までのデッサンのしっかりした骨太の作品を一堂に会したいと念じていた。このほどF氏のご好意で購入後、一括、当館にご寄贈頂くこととなった。夢は実現した。やがて当館のギャラリーの一画に、詩的で素朴な白い町並みが姿を現すことになる。

（館長　伊藤郁太郎）

展示室から

昨年4～9月に開催した特別展「美の求道者 安宅英一の眼―安宅コレクション」を東京・福岡・金沢と巡回いたしております。

三井記念美術館
（平成19年10月13日～12月16日）

皮切りとなった三井記念美術館（東京・日本橋）は、2005年に重要文化財の三井本館にオープン、多数の国宝や重要文化財をふくむ三井家ゆかりの品々を所蔵・展示しています。三井本館は昭和初期を代表する近代建築で、最初の部屋は重厚な趣の内装の展示室となっており、婦女俑（表紙）をはじめ、国宝・重要文化財など、そうそうたる中国陶磁を展示しました。建物の重厚さと中国陶磁の謹厳さが絶妙にマッチし、十分に作品の魅力を味わっていただけたことと思います。つぎに明るく広い展示室で中国・高麗陶磁、国宝の如庵を再現した茶室には砧青磁、最後に朝鮮陶磁と、出品点数は少ないながらもそれぞれの特色を生かし、充実した構成となりました。28年ぶりの東京での安宅コレクション展ということもあり、昔をなつかしんでくださる方はもちろん、新たなファンも獲得し、好評のうちに終了しました。（M.K.）

福岡市美術館
（平成20年1月5日～2月17日）

大阪市立東洋陶磁美術館が開館する前年の昭和56年に、福岡市美術館で「安宅コレクション・東洋陶磁名品展」が開催されました。それ以来、九州では27年ぶりの「安宅コレクション展」となります。福岡会場では、大阪展に出品された全点が展示され、東京会場や金沢会場とは違った規模の大きい展覧会となっています。また、九州国立博物館では当館の所蔵品による企画展「朝鮮白磁―純白・乳白・青白の器」（出品点数32点）が平成20年3月下旬までの予定で開催中です。（T.D.）

金沢21世紀美術館
（平成20年2月29日～3月20日）

本展の金沢での開催は、金沢21世紀美術館特任館長でもある蓑豊前大阪市立美術館長との連携プレーで最後の最後に決まりました。安宅家はそもそも現在の金沢市金石町の出身で、英一氏の祖父・幸吉氏の代に豪商となり、父・弥吉氏が貿易商として安宅産業の基礎を築きました。金沢展では国宝2点、重要文化財11点を含む56点が出品されます。現代美術の展示で注目される金沢21世紀美術館で、安宅コレクションがどのように展示されるかご期待下さい。（H.K.）

次回展示予定：平成20年4月1日（火）～7月3日（木）
テーマ展「天にささげる器―朝鮮時代の祭器―（仮）」

編集後記

平成20年は干支のトップの子年となります。今年の年賀状には、古典的な図柄や、ディズニーのミッキーマウスなど、様々な鼠が登場しました。昨年は様々な偽造事件など暗い話が多くありました。今年からはじまる新しい干支の12年間は、良いことが続くように願うばかりです。この4月には、当館も展示を再開します。どうか、今年がみなさまにとっても、当館にとっても良い年でありますように。（S.S.）

ボランティアの窓

神戸元町から山側へ坂道を上ると正面にクラシックな兵庫県公館が現れます。建物の外観も内装も素晴らしいのですが、館内の空調の快適さに加え、作家自身が寄贈した作品が多数あります。何のガードも監視カメラも無く、絵がそのまま壁に掛けてあったり、工芸品がテーブルに置いてあったり、無防備というか、ハラハラしながらも感動する公館です。毎土曜日に無料で公開していますので皆さんも是非一度足を運んで見て下さい。（M.K.）

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信　通巻第84号
2008年1月1日発行　No.23-4（年4回）

編集・発行：大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン：清嶋滋+studioTWEN　印刷：岡村印刷工業株式会社

平成19年度友の会夏期講座

「青磁の歴史と新知見」（1）

友の会会員の方々を対象に、当館学芸員による基礎講座を開講いたしました。84号、85号の二回にわたって、その要旨を掲載いたします。

「中国の青磁入門」

野村恵子

1. 青磁とは

青磁とは、微量の鉄分を含んだ素地に、酸化第二鉄を呈色剤とした釉をかけ、1200度以上の高温で還元焼成したやきものです。素地は硬く焼きしまり、釉は青緑色に発色します。青磁は、中国で生まれ、発展し、東アジアから西アジアの地域に大量に輸出されたほか、韓国、日本、タイ、ベトナムへ技術が伝播した、東アジア独自のやきものです。

青磁が磁器か陶器か、という分類の問題については、国・地域によって見解が異なります。それは、やきものの分類基準が、国・地域により少しずつ異なることに起因しています。例えば欧米では青磁は、釉の有無を問わず素地が白くない硬質のやきものとして認識され、stoneware（日本語では炻器（せっき）と訳す）に分類されます。それに対して、中国では瓷器、陶器という分類が用いられており、青磁は、素地が緻密に焼きしまった、釉薬のかかったやきものとして瓷器に分類され、かつ「青瓷」と表記されます。「瓷」には、素地が緻密に焼きしまった、釉薬のかかったやきものという意味があります。日本では、欧米式の分類によりながら、磁器の定義の幅が広く、青磁を磁器としてとらえています。

青磁の釉色は古くから玉にたとえられています。中国では、新石器時代から玉で様々な工芸品が作られてきました。単に玉が美しいからではなく、永遠の命、高い徳、権力の象徴など様々な力を備えた貴重な石と考えられていたからです。それは、玉の希少性によるものかもしれません。玉は、ネフライトと呼ばれる淡緑または濃緑色の石です。中国では新疆ウイグル自治区の崑崙山でしか産出されないたいへん貴重なもので、限られた人しか手に入れることができないものでした。中国の人々にとっては精神的にも物質的にもたいへん重要なものです。青磁の釉色が、深みのある青緑色が理想とされたのは、玉の存在があったからと考えられます。自然界に存在する貴重な玉の色調や質感を人間の手で再現することに様々な努力がなされたといえます。

2. 中国青磁の変遷

現在、青磁の出現は、後漢時代前期と考えられていますが、そこにいたる過程に灰釉陶の存在があります。紀元前1500年頃、灰釉陶という史上初めての高火度焼成の施釉陶が誕生しました。灰釉は天然の草木の灰を主材料とした釉で、1200度以上の高温でとけます。窯の中で燃料の灰が素地にふりかかり、ガラス状になる自然釉にヒントを得て考案されたと考えられます。灰釉陶の出土例は中国南部に多いことから、発祥もこの地域とされ、江西省清江、浙江省上虞などで窯跡が確認されています。灰釉陶は、西周から春秋・戦国時代に生産地が拡大し、特に戦国時代には作風が多様化して、青銅器の器形や文様を写した精巧なものなどが作られました。続く秦・前漢時代には、成形、釉胎に前代よりやや劣る点があり、一般に停滞期と考えられています。

後漢時代前期頃に、浙江省東北部の上虞市周辺で、灰釉陶が改良されて青磁が誕生しました。越窯の青磁です。灰釉陶生産の技術的基盤、土、燃料、水などの原材料の基盤、新石器時代からの文化的基盤などの複数の要素が起因して、灰釉陶から青磁へという技術革新が実現したと考えられています。胎土は白く緻密で、黄緑色の釉がムラなく全体に滑らかにとけ、灰釉陶とは全く異なった特徴をもちます。三国から西晋・東晋には、さらに成形技術・轆轤技術が向上し、釉の改良と焼成技術の向上により青緑・黄緑などの安定した釉色が得られました。特に明器（めいき）類の器種が豊富で、江南地方一帯の墳墓から多数出土しています。やがて青磁生産の技術は中国南部一帯に拡大し、各地で特徴のあるものが出現しています。実用的な器種が増加し、明器類は逆に減少していきます。線刻・片切彫り・印花・鉄斑などの器面装飾技法が多用され、蓮弁文などの従来にない文様が見られます。6世紀中頃には北部の黄河流域地域でも青磁の焼成が始まりました。胎土・釉調・造形が江南のものとは全く異なり、別の系譜と考えられますが、産地は明らかではありません。その後、華北では次第に白磁の生産に切り替わっていきます。

8世紀の中頃には、越州、婺州、岳州、洪州、寿州などで青磁が生産されており、特に越窯の製品が極めて優れ、人気を博していました。薄く均一でなめらかにとけた青緑色の釉、装飾を排した簡素な器形、蛇の目高台などが特徴です。越窯は、1930年に浙江省慈溪市の上林湖畔に窯跡が確認されました。晩唐時代の越窯青磁は、しばしば詞に歌われ、「秘色」、「千峰翠色」など、その美しさが称えられています。「秘色」の意味は宮廷用に納め、一般には使用できないものというのが定説ですが、「秘」の字が「碧」と音が通じるため、美しい青い色の石の意味も込められているとの指摘もあります。1987年、陝西省扶風県法門寺から越窯の碗と「瓷秘色」の語が記された石碑が出土しました。石碑には唐・咸通15（874）年の紀年銘があり、晩唐期の秘色青磁の実物が「秘色」の文字とともに初めて確認されたのです。黄みがほとんどない光沢のある淡青緑色の釉、大振りの碗には輪花の装飾がなされ、高い輪高台の内側には目跡が残るなど、8世紀のものとは異なる「秘色」の実態が明らかになりました。

唐の滅亡後、越窯は呉越国の支配下に入り、質の高い青磁を焼き続けました。成形はさらに薄く丁寧になり、釉はオリーブ色を帯び、陰刻・片切彫りなどの彫り文様が始まっています。太平興国3（978）年、呉越国は新興の宋に下り、大量の越窯青磁を献上したと記録に残ります。窯跡から出土した「太平戊寅」銘の陶片群がそれを証明しています。北宋時代の越窯では、五代とほぼ同様の青磁が引き続き生産され、宮廷へも献上されていましたが、11世紀半ば以降は献上の記録もないため、北宋中期頃から急激に衰退したと従来考えられていました。しかし1990年代の上林湖周辺での窯跡の発掘調査により、汝窯風の青磁、南宋官窯風の青磁などの陶片が出土し、操業は南宋まで続いていたことが、近年確認されています。

北宋末頃、浙江省南部の龍泉窯が青磁生産技術を確立してきます。この地では、遅くとも南朝から陶磁生産を行っていました。中・晩唐には越窯の影響が強くあり、独自のスタイルを確立したのは北宋早期頃、急速に発展するのは北宋末～南宋初頃です。薄く均一で透明感のある釉がかかり、片切彫りで蓮花文などの器面装飾がなされています。

華北では、陝西省の耀州窯で、北宋時代に青磁が焼成されています。この地では、唐代に三彩、白釉、黒釉などに加え、一部で越窯風の青磁を焼いていました。五代時代には、青磁が主体となり、黒胎で白化粧のもの、白胎で深い浮彫のあるもの、「官」字銘のあるものなどが確認されています。北宋になって、片切彫りの技法が確立すると、流麗な文様と透明感のあるオリーブグリーンの釉色はいずれも耀州窯青磁の際立った特徴となりました。釉色の変化は、薪から石炭への燃料の変化に起因します。12世紀頃には、印花の技法も加わり、細かい文様表現も増えました。1126年北宋が滅び、華北一帯が金の支配に入ると大量生産のためか、釉は黄みを帯び、碗鉢には重ね焼きによる釉剥ぎが現れ、簡単な刻文が増えるなどの変化が見られ、全体に衰退へと向かったようです。

汝窯は、多くの文献にその名が残されながら、長く実態が明らかでなかった窯です。20世紀初頭に英国のパーシヴァル・デイビッド卿が故宮伝世の汝窯とされる作品について、様々な文献を検討し、淡青緑色の釉、丁寧な成形、小さな目跡を持つ一群の青磁を汝官窯と特定しました。1986年に、河南省宝豊県の清凉寺で伝世品に類する陶片と窯道具が発見され、この地が汝窯と関係があることが確認されました。しかし同時に鈞窯タイプ、磁州窯タイプ、耀州窯タイプなどの陶片なども出土し、疑問点も残しました。1990年代末、そこから約30kmの汝州市張公巷街で、新たに青磁片や窯道具、廃棄坑などが発見されました。出土資料には汝窯とされる伝世例に類似点があるとともに相違点もあります。さらに2000年、清凉寺での発掘により窯体などが確認されるとともに、伝世品に例のない器形も出現し、改めて汝窯・北宋官窯の問題がクローズアップされています。

金の華北支配と宋の南下により、青磁生産の中心は再び江南へ移りました。都の杭州周辺に、窯を設け、宮廷用の青磁を焼いたことが文献に残ります。修内司官窯と、郊壇下官窯です。1930年に市南郊の烏亀山麓で郊壇下官窯が発見され、製品の特徴が明らかになりました。1985、6年に発掘調査が行われ、窯体と作坊が確認、鉄分の多い胎土に釉を重ねがけし、二重貫入の入ることが特徴です。1996年、鳳凰山北麓の老虎洞に新たに窯跡が発見され、調査の結果修内司官窯であると報告されました。窯体、作坊、青磁片、窯道具などが確認されています。胎土は香灰、暗灰、黒色など、釉は粉青色と黄みがかったもの、釉層に薄手と厚手の二種あるなど製品に幅があり、底裏に小さな目跡が残るものが汝窯との関連性を示唆するとされています。

龍泉窯では、北宋末から南宋初にかけて急速に生産量を増し、輸出も盛んに行われました。12世紀頃に灰白色の素地に淡青色の釉を厚くかけた、丁寧な作りの無文の製品が作られ始めます。日本では砧青磁と呼ばれるもので、12世紀末～13世紀初頃に完成したと考えられます。砧青磁については、韓国・新安海底遺物の引揚によって、元時代になっても生産が続いていたことが明らかになりました。また、龍泉窯でも郊壇下官窯の黒胎青磁に類したものが焼成されていますが、両者の関わりは解明されていません。元時代の龍泉窯青磁の手法として、鉄斑文、貼花文などの器面装飾があります。明時代には釉調が変化し、俗に七官手と呼ばれる緑色がかったものとなります。その後は景徳鎮での彩絵磁器におされて青磁の生産は、次第に低下していったと考えられています。

「高麗青磁入門」

片山まび

高麗時代（918～1392）は、日本の平安～室町時代と平行する時代で、仏教文化と貴族文化が栄えた時代です。この時代の陶磁器の中心は何といっても青磁でした。以下に、その時代ごとの変化と特徴を述べたいと思います。

10～11世紀：高麗青磁の登場

高麗青磁がいつ登場したのかについては、100年以上もの間、論争が繰り返されてきました。しかし、最近ではおよそ10世紀頃と考えられています。高麗の地に中国・浙江省越窯から青磁の技術が伝えられると、またたく間に発展をとげ、11世紀半ばには日本にも輸出されるほどに美しい青色の青磁となっていきました。

12世紀：高麗青磁の発展

12世紀前半に高麗を訪れた北宋の使臣、徐兢（じょきょう）は『宣和奉使高麗図經』のなかで、近頃、青磁が最も精巧となり、高麗人たちが青磁の色を翡色と呼んだと記しています。この言葉を証明するように、12世紀前半には、さらに美しく澄んだ青色の青磁が登場します。

12世紀半ばになると、高麗青磁は中国青磁とは異なる独自の道を進んでいきます。その端的な例が、文様を彫った部分に白土と赤土を塗りこめ、青磁に白黒の文様をほどこす象嵌（ぞうがん）青磁です。中国・宋代の青磁は釉色の美しさや変化に重きをおきましたが、高麗青磁では文様を中心に展開していきます。

13世紀：象嵌・辰砂（しんしゃ）・金彩青磁の展開

13世紀の高麗青磁については、近頃の発掘により様々な新資料が知られることとなり、研究者間では最もホットな研究テーマとなっています。すなわち、今まで12世紀と考えられていたものが13世紀に下るのではないか、と若い研究者たちが考え始めているのですが、近くその結論が出ることでしょう。

ただ13世紀の青磁に、銅の呈色によって赤色を加える辰砂、金をほどこす金彩が見られることは間違いなく、高麗青磁には白・黒・赤・金・青という、さながら五彩や色絵のように多種の色彩が備わることとなります。しかし、その色を濫用することなく、必要な部分にだけ控えめに用い、あくまで青磁の色や形の美しさを生かしている点が高麗青磁の美ともいえるでしょう。

14世紀：青磁から粉青へ

アジアの各地で、14世紀代の沈没船が発見されていますが、それらから高麗青磁が見つかることがあります。14世紀前半の韓国全羅南道新安沖沈船では美しい青色の青磁が発見されていますが、14世紀後半の中国山東省蓬莱古船では褐色のスタンプで文様が押された褐色の青磁が見つかっています。14世紀後半になると、高麗では貿易体制の変化や倭寇などの影響によって金属が不足し、陶磁器生産の奨励策が出されます。これとともに蓬莱古船の例のように、堅牢で、簡略な装飾をほどこした褐色の青磁が登場しますが、これらは朝鮮時代の粉青（ふんせい）と呼ばれるものに姿を変えていきました。

高麗青磁の歴史はかくも長く、中国から技術は導入されますが、その展開はきわめて特異で独自であると言ってよいでしょう。とりわけ青磁に多彩の文様をいかにほどこすかという美意識は、中国には見られず、高麗青磁を鑑賞する際のポイントです。その独自性へのあくなき要求は、中国と日本で煩雑に政権交代が行なわれた時代にあって、高麗のみが長く独立を保っていった強靭な力にも通じるように思われます。

1
青磁神亭壺
越窯　呉～西晋時代・3世紀
h:48.5cm　Acc.No.11319

2
重要文化財　青磁刻花牡丹唐草文瓶
耀州窯　北宋時代・11～12世紀
h:16.7cm　Acc.No.10740

3
重要文化財　青磁鳳凰耳花生
龍泉窯　南宋時代・12世紀
h:28.8cm　Acc.No.10383

4
青磁輪花鉢
高麗時代・12世紀前半
d:14.2cm　Acc.No.22717

5
青磁象嵌竹鶴文梅瓶
高麗時代・12世紀後半
h:29.2cm　Acc.No.20206

6
青磁象嵌辰砂彩牡丹文壺
高麗時代・13世紀
h:19.5cm　Acc.No.20895